

新宿区

# UD まちづくり ニュースレター

Vol.

19

WINTER

第19号  
2025.12

## UDスポット 公益財団法人 神経研究所・附属晴和病院

こうえきざいだんほうじん  
しんけいけんきゅうじょ・ふぞくせいわびょういん

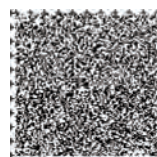
ユニバーサルデザイン

# UD とは？

年齢・性別・国籍・個人の能力等にかかわらず、  
できるだけ多くの人が利用できるよう生活環境その  
他の環境をつくり上げていく考え方です。

新宿区には、多くの外国人をはじめ、様々な人々  
が生活しています。区では、移動しやすく、利用  
しやすく、わかりやすいまちを目指して、令和2  
年3月にUDまちづくり条例を制定しました。

このニュースレターでは、UD スポットの紹介  
や新宿区の取組などをお伝えしていきます。



Uni-Voice

1951 年に開業した公益財団法人神経研究所・附属晴和病院は、2025 年 4 月に新しく生まれ変わりました。

精神科は閉鎖的なイメージを持たれがちですが、都心にある晴和病院では、患者さんやご家族が社会から孤立することなく、日常に近い生活を送れるよう、様々な工夫が施されています。

ここでは、人々の特性に寄り添いながらも、誰もが「普通に」利用できるように整備されたポイントをご紹介します。

～お話を伺った方々～



公益財団法人  
神経研究所  
企画室長  
南部谷さん



株式会社  
岡田新一設計事務所  
取締役 副社長  
尾崎さん



株式会社  
岡田新一設計事務所  
代表取締役  
羽鳥さん

## Good UD ポイント

### 心地よく過ごせる建物内のデザイン

患者さんの中には五感が敏感な方も多いため、全体的に落ち着いたデザイン・色使いや照明計画になっています。

過度な配慮は控えつつ、フラットな床や手すりなど、誰もが使いやすい機能が備わっています。



木目調で統一された  
温かい雰囲気 of 病棟。



病棟のバスルーム。  
洗い場までフラットに  
アクセスできる。

### 運営者コメント

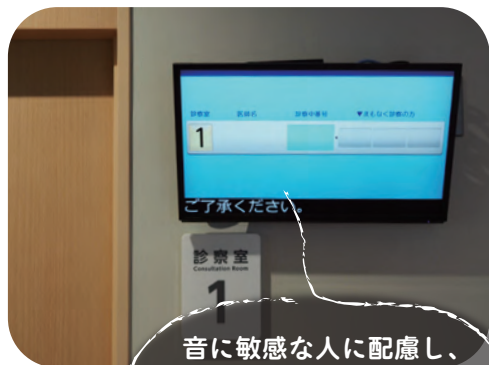
「治す医療」を担う病院部分では、患者さんが一般の人と変わらず「普通に過ごせる環境」づくりを大切にしています。患者さんの特性を考えつつ、過度な配慮はしないことも、一種のユニバーサルデザインなのではないかと考えています。  
(南部谷さん)

## Good UD ポイント

### 特性に寄り添う理解しやすいサインの設置

建物内のサインは、様々な特性を持った人が利用することを考えて設計されています。

また、患者さんも空間づくりに参加できるような工夫もされています。



音に敏感な人に配慮し、  
モニター表示による  
診察の呼び出しを  
行っている。

### 設計者コメント

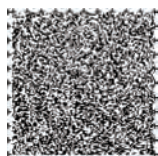
普通に過ごせる環境を心掛ける一方で、五感が敏感な方が多いことから、色や音には気を遣っています。

サインは刺激の少ない色に統一するほか、診察の呼び出しは音声ではなくモニター表示とし、音による刺激を軽減しています。(尾崎さん・羽鳥さん)



病室入口に設置された  
アクリルケース。  
表示する内容を  
手軽に変更できる。

折り鶴は患者さんが色を考えて作成！



Uni-Voice



トイレ入口のサイン。

日本語・英語・ピクトグラムの3種類で示されている。

## Good ぽ UD ポイント

### 誰もがリラックスできる「だんだんテラス」

日影規制による建物の形を活かし、各階にテラスが設けられています。使い方を試行錯誤しながら少しずつ形にしていこうという思いを込めて、「だんだんテラス」と名づけられ、リラックスできたり作物の栽培をしたりと階ごとに様々な用途で活用されています。

#### 運営者コメント

1階のテラスは待合にいる方々が気分転換できるスペースです。また、4階のだんだんテラスでは入院患者さん、デイケアや晴（Halu）のメンバーさんや作業療法のプログラムの一環として、みんなでコマや野菜栽培を行い、収穫イベントなども開催しています。（南部谷さん）

1階のテラス。  
テーブルと椅子があり  
のんびりと  
過ごすことができます。

患者さんと一緒に  
テラスで育てられた稲の  
脱穀と粃摺りを行いました！



写真提供：公益財団法人神経研究所

## Good ぽ UD ポイント

### 多様な特性を持ちながら、日常を送れる環境

生活訓練施設や地域活動支援センター、有料障害者ホームなど、スムーズに社会に復帰できるよう支援するための様々な機能が備わっています。医療だけでなく、日常生活や就労のサポートまで一体的に行うことで、患者さんとその家族が安心して地域で暮らし続けることができます。

#### 弁天町ハウス

障害者のための居住空間。  
家族と住むこともでき、  
入院と在宅の中間の新たな  
選択肢となっている。

#### 地域活動支援センター 晴（Halu）

区内に住所を有する発達・精神障害者の居場所として、生活支援のサービスを提供。

#### 運営者コメント

「支える医療」として、生活支援センターがあります。地域活動支援センター晴（Halu）、附設生活支援センター和（Nico）をはじめとした複合的な機能を備え、治療中から社会復帰、さらに復帰後までを一貫して支える体制を整えています。将来的に患者数が減少する見込みを踏まえ、病床として使用しているスペースも、将来は支援機能に転用できるように設計されています。（南部谷さん）

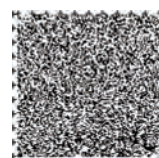
#### 附設生活支援センター 和（Nico）

生活訓練施設として支援を行っている。生活が一人で完結しないよう、個室の設備は最低限。

## 運営者インタビュー

晴和病院は、創設者・内村祐之の「患者だけでなく、その家族の生活にも配慮した病院をつくりたい」という想いを基に、1951年に弁天町で開業しました。「地域に開かれ、患者が社会とつながることができる場所」という理念を受け継いだ新病院には、「治す機能」と「支える機能」が備わっており、これらを組み合わせた「治し支える医療」により、患者さんの社会参加や社会復帰を切れ目なく支援しています。

精神科を受診される方は「精神病患者」とひと括りにされがちですが、症状は様々で、多くの方は一般の人と大きく変わらない生活を送ることができます。晴和病院では、「発達障害は病気ではなく個性である」という「ニューロダイバーシティ」の考え方を重視しており、今後も、多様な特性を持つ人々が自分らしさを活かして「普通に」社会で暮らしていけるよう、支援を続けていきます。（南部谷さん）



Uni-Voice